成蹊学園の歌

- 成蹊の歌
- 心力歌

成蹊の歌

作詞：志田義秀　作曲：信時　潔

1. 土の育くむ　武蔵原野の林
空を限りて　秩父連峰走る
聞けよ吾等が　心力歌の生命
この地この歌　吾等讃えん
その名　おお成蹊

2. 昨日の吾を　超えし輝き尊し
吾が野に萌ゆる　草の語るに聞かずや
白光の空　高くそそる筑波と
共に向上の　吾等の姿
その名　おお成蹊

3. 宇(いえ)は大なり　母校成蹊の宇(いえ)
一つに集ふ　族(うから)吾等の園の
愛の象徴　井の頭の泉よ
陽は野の上に　吾等の上に
その名　おお成蹊

心力歌　文：小林一郎

第一章

天高うして日月懸かり、地厚うして山河横はる。

日月の精、山河の霊、あつまりて我が心に在り。

高き天と、厚き地と、人と対して三となる。

人無くしてそれ何の天ぞ。人無くしてそれ何の地ぞ。

人の心の霊なるや、もって鬼神を動かすべし。

人の心の妙なるや、もって天地に参ずべし。

燦たるかの月と日と、遙かに我が心を照らす。

我が心の凝りて動くや、よく日月を貫くべし。

峨々たる山、漫々たる河、常に我が心に通ふ。

我が心の遠く翔るや、よく山河を包むべし。

ただ六尺の肉身に限らるる、我が心ならず。

ただ五十年の生涯に、つきぬべき我が心ならず。

見よ、雲に色あり、花に香あり、聞け風に音あり、鳥にこえあり。

この中に生を託したる、われ人にこの心あり。

至大至剛はこれ心力、至玄至妙はこれ心霊。

ただこの心あるが故に、われ人は至上至尊なり。

それ眼前の小天地は、離合聚散常ならず。

我と我が身と心とを、この中にのみ限るものは。

天なる日月の精を見ず、地なる山河の霊を知らず。

その精と霊とを鐘めたる、わが尊さをわれと悟らず。

眼にさへぎる影をはらへ、耳に塞がる塵を去れ。

その影消え、その塵絶え、心はすみて鏡の如く。

湛然として淵の如くば、かの小天地に限られし。

きのふのわれを外にして、至上至尊のわれあるを知らむ。

心力歌　文：小林一郎

第二章

心に力ありといへども、養はざれば日に泯(ほろ)ぶ。

心に霊ありといへども、磨かざれば日に昏(くら)む。

力泯(ほろ)び霊昏(くら)みて、ただ六尺(りくせき)の肉身(にくしん)を、

天地の間に寄するのみ、哀しからずや、世俗の人。

われに守る所なく、われに恃(たの)む所なければ。

境(きやう)によりて心うつり、物のために心揺らぐ。

得(う)るに喜び失ふに泣き、勝ちて驕(おご)り敗れて怨む。

喜ぶも煩ひを生み、泣くもまた煩ひを生む。

驕(おご)れば人と難を構へ、怨むも世と難を作す。

現(うつつ)にはわが身を労し、夢にはわが心とたたかふ。

かひ無きけふを送りつゝ、あすの希望に活(い)くるを知らず。

悼(いた)ましからずや、かゝるうちに、五十年の生涯盡(つ)く。

心の力と心の霊と、われに備はるものぞと知らば。

これを養ひ磨くべき、道おのづからこゝに開けむ。

天に呼ぶも天は声なし、地に訴ふるも地は答べず。

雲往き雲來(きた)る一春秋、花開き花落つ一旦暮(いったんぼ)。

天地を心の中(うち)に求めず、心の平和を天地に求む。

たゞ一念の惑(まど)ひによりて、われから闇に入るを悟らず。

みづから養ひ自ら磨けば、わがこの心わが為に。

よく新なる境を作り、よく新なる生を開く。

鬼神の力を假(か)るを用びず、鬼神の力われに在り。

雷霆(らいてい)の威を羨(うらや)むなかれ、雷霆(らいてい)の威もわれに存す。

われを苦めしもわが心、われを救ふもまたわが心。

これあるが為にわれ悩めど、これあるがゆゑにわれ独り尊し。

心力歌　文：小林一郎

第三章

観(み)よ、明(あきらか)に観よ、天地はこれわが家。

鳥飛ぶはかの蒼々たる天、獣走るはこれ曠(くわう)々たる地。

地に草木あり常に榮え、天に星辰(せいしん)あり高く輝く。

陰晴(いんせい)はすなはち天の節、温涼(おんりょう)はすなはち地の時。

時たがはず節渝(かは)らず、萬物(ばんもつ)こゝに生を享く。

聴け、静に聴け、萬有(ばんいう)はこれわが友。

飂飂(りうしう)たるは風の音か、澎湃(ほうはい)たるは水の聲か。

澎湃(ほうはい)はこれ地の歌、飂飂(りうしう)はこれ天の樂。

生ある者、生なき者、調べを合わせてこれに和す。

春秋代り旦暮(たんぼ)移るも、かくて天地は寂莫(せきばく)たらず。

われ人共に備はれる、この萬象(ばんしょう)に向ひて立つ。

尊(たふ)とからずやわが此(こ)の生、樂しからずやわが此の世。

樂しきを樂しと知らず、尊きを尊しと見ず。

内なる寶をよそにして、人は形ある寶を求む。

求むるところいよいよ多(おほ)く、失ふところますます繁し。

みづから糾(な)へる迷ひの縄に、身を繋ぎまた心を繋ぐ。

徳無くば堅城に居るも、堅城は身を護るに足らず。

心むなしくば錦衣を着くるも、錦衣は身を飾るに足らず。

権勢はたゞ悩みを増し、富貴はたゞ、煩ひをなす。

かくて相競ひ相争ふも、たゞこれ空しき夢ならずや。

天地とともに三(みつ)となるべき、尊き心を寶として。

よく篤(あつ)くこれを養ひ、能(よ)く怠らずこれを磨けば。

行ふ業に力溢れ、出す語(いだ ことば)に霊籠り。

不朽の生命こゝに具す、これをぞ眞(まこと)の人といふべき。

心力歌　文：小林一郎

第四章

心の力一たび凝(こ)れば、向(むか)ふところみな靡く。
鬼に逢(あへ)ば鬼を服し、魔にあへば魔を降(くだ)す。
かの水の漲(みなぎ)るや、よく千仞(せんじん)の岡を浸(ひた)す。
たゞわが心は動かずして、高く怒濤の外(ほか)に立つ。
かの火の熾(さかん)なるや、よく百里の原を燎(や)く。
たゞわが心は騒がずして、紅蓮(ぐれん)の焔の中に笑ふ。
猛虎の猛きも雲に駕(が)し得ず、蚊龍(かうりう)の霊なるも地に潜み難し。

たゞわが心の向ふところ、敵する者無きがゆゑに。
よく雲を凌(しの)ぎて高く翔(かけ)り、よく地を貫きて深く潜む。
放てば六合(りくがふ)に充ちぬべく、収むればすなはち密に藏る。
かの炎帝の火龍を鞭(むちう)ち、極熱の氣(き)天地を包めば。
金石鎔(とろ)け草樹燃え、江海ともにあせ果てて。
鳥は翼の力を失ひ、魚(うを)はことごとく地に轉(まろ)ぶ。

たゞわが心一たび凝りて、炎熱去れよと念ずれば。
清涼の境たちまち開け、涼風萬斛(ばんこく)身をめぐる。
かの沍寒(ごかん)の天地を封じ、氷雪深く山河を鎖せば。
日に熱なく月に影なく、　黯然(あんぜん)として物みな死す。
血は氷りて環(めぐ)り流れず、肉は裂けて堕ちなんとす。
たゞわが心一たび凝りて、苦寒なんぞと叱咤(しった)すれば。
元氣四體(したい)のほかに溢れて、陽春の候たちまち現ず。
心虚(きょ)なれば髄危(たい)し、動けば労し行けば喘ぐ。
心凝りて動ぜざれば、髄(たい)ゆたかにして氣飢ゑず、
千里に行くも、足輕(かろ)く、萬鈞(ばんきん)を担ふも身は安し。
悠々として立ち、怡(いい)々として座す、貴きかなわが心力。

心力歌　文：小林一郎

第五章

心はこれ身の王、王に威ありて國泰し。

心を尊び心を養う、その徳すなわち身に現ず。

疫癘もこの人を襲わず、毒蛇もこの人を螫さず。

晝は煩いなくして居泰く、夜は夢なくして睡り穏なり、

出る息よく律に合し、入る息よく呂にかなふ。

精力毛髪の末に溢れ、顔色常に嬰児のごとし。

眼曇らず、足追らず、青天を戴き大地を踏む。

行けば瑞氣これを護る、妖氛いかでかこれを犯さむ。

語ればその聲雲に徹す、天童耳を傾けて聴かむ。

それ心よく物を制すれば、敢て物の爲に制せられず。

弓を引きてわれに向ふも、われ静かにこれに對すれば。

その箭虚しく空を射て、さらにわが身に近づかず。

戟をとりてわれに迫るも、われおもむろにこれを迎ふれば。

刃はわが身に加はるとも、絶えてわが血に染むことなし。

われ手をあげて靡けば、霧を開きて鴻雁　來り。

嶺を分けて麋鹿聚り、欣々としてわれと親しむ。

われ手を揮って去れといへば、豺狼もその尾を垂れ。

鷙鳥もその爪を包み、惶々としてわれを避く。

群りてわれを誉むるも、わが心は擾されず。

集りてわれを毀るも、わが心は激することなし。

われを玉樓金殿置くも、われは悠々たり、何をか問はむ。

われを深山窮谷に　囚ふるもわれは怡々たり、なにをか痛まむ。

身は飢うるも心は飢ゑず、身は飽くも心は飽かず。

かくの如くなるを得て後、はじめてわれ獨り尊し。

心力歌　文：小林一郎

第六章

心の霊一たび輝けば向ふ物みな照さる。

宇宙の廣(ひろ)きも廣(ひろ)しとせず、毛髪の微(び)なるも微(び)といはず。

われを繞(めぐ)れる萬象(ばんしょう)は、色相もとより無限なり。

形も無限。聲もまた無限、香も無限、味もまた無限。

かく限り無き性(せい)をそなへ、かく限りなき時の中に。

限り無き変化(へんくわ)を示せる、萬象(ばんしょう)の中(うち)にわれ立てり。

されどわが心の霊なる、これを照して敢て漏(もら)さず。

あるは分ちあるは比べ、あるは外よりあるは内より。

同じき中(なか)に異(い)を求め、異(ことな)れる間(あひだ)に同(どう)を捉へ。

有(あ)るによりて無きを推(お)し、來(きた)るによりて去るを察し。

果てなき微妙(びめう)のはたらきに、この萬象を照し盡(つく)して。

わが三寸の胸臆(きょうおく)に、かかる無限の相を藏(おさ)む。

六尺の身に宿れども、この心の翔(かけ)る所は。

海を超え陸を超え、天地の外に出んとす。

五十年の生を享(う)くれど、この心の通ふところは。

幾萬年のいにしへより、百千劫(せんごう)の後におよぶ。

われは古人(こじん)の　面(おもて)を見ざれど。古人の心に觸(ふ)れつべし。

心と心と相觸(ふ)るれば、相見て相語るに異らず。

わが友は海のそとに在(あ)れど、友の心はよくわれに感ず。

心と心と相感ずれば、相共に住むと同じからずや。

時は古今(ここん)によりて隔たり、所は東西によりて分たる。

かくかくしてこの身は制せらる、ただこの心は制せられず。

心と心と相あふ時、古今もなく東西もなく。

無限の境をごこに開く、妙なるかなわが心の霊。

心力歌　文：小林一郎

第七章

心はこれ身の王、王聖にして国平けし、
心に塵を止めざれば、森羅萬象自ら見ゆ。
無象の象を観得て後、有象のものに對すれば。
ただ一滴の雫にも、風雲月露の象そなはる。
無聲の聲を聴き得て後、有聲のものに向ふ時は。
ただ一葉の落つるにも、自然の歌の調べあり。
九萬里に翔る大鵬は、これ大なる物の美。
桑楡に安んずる尺鷃は、これ小なる物の美。
かの北海の洪濤はこれ大なる調の妙。
軒に響く點滴は、これ小なる調の妙。
蜉蝣の命の旦夕なるも、彭祖の壽の千歳なるも。
相對し相俟ちて、宇宙の調和をわれに示す。
顕晦精疎ことごとく、心の鏡に映じ来る。
これを収めて一とせる、眞の人の貴きを知れ。
この心もて事に當れば、事ごとにみな精を極む。
鍬とりて耕せば、功徳の種を土に植え。

市に立ちて商へば、人を利しまた己を利す。
學べばかならずその蘊を究め、説けばかならずその秘を悉す。
節奏を合わせて歌うたひ、筆を揮ひて詩を成せば。
天地萬有を讃じ得て、至妙の霊感を人にとゞむ。
刀を手にして石に對し、彩を合わせて帛に注げば、
天地萬有の神を寫して、寰宇の外に人をいざなふ。
戦えば勝ち、攻むれば取り、靡けば人翕然として集まる。
あゝかくの如くなるを得て、はじめてわれ獨り、尊し。

心力歌　文：小林一郎

第八章

限り無き心の力を知れ、果てなき心の霊を知れ。
迷ひの作れる天地の外(ほか)に、眞(まこと)の天地のあるを見よ、

われよく境を作る時は、絶えて境の為に制せられず。
神の闢(ひら)ける國(くに)に生れ、神の後(のち)なる君に仕へ、
世に雙(なら)びなき國の光に、わが踏む道はつねに照され。
貴き親の恩愛(おんあい)に、わが住む庭はいつも潤(うるほ)ふ。
身に享(う)け得たる幸を、あつくわが心に保ち。
ひたすらにわれ依らず、またひたすらに疎(うと)んぜず。
悠々として立ち、怡々(いい)として居り、平(たいら)かに思ひ、安らかに動けば。

物はみなわれに親しくして、人はみなわが友たるべし。
獨(ひと)り在ればわれ獨り樂(たのし)む、共にあれば人と共に樂(たのし)む。
家に在れば家榮(さか)え、門をめぐりて鳥歌ふ。
村に在れば村榮(さか)え、山にも丘にも恵風(ゑふう)満つ。
進みて國事(こくじ)に参ずれば、よく百年の計を立て。
退きて野(や)にをる時は、風を改め俗を移す。
犖々(らくらく)たりその胸宇(きょうう)、昂々(かうかう)たりその風貌。
仰(あふ)ぎて天に向ふときは、天の神遠く笑ひ。
俯(ふ)して地に視(み)るときは、地の霊共にこれを讃ず。
限りある生を享(う)くれども、限りなき力を後にとどむ。
限られし地に身を置けど、限られぬ光を長(とわ)に放つ。
たれかこの力を與(あた)へし、力の泉はわれに在り。
だれかこの光を與(あた)へし、求むればわが心の光、

あゝ天は高く、地は厚し、われに心の霊なるあり。
三(みつ)のもの永く相照す、うるはしきかな、偉(おほい)なるかな哉。